

連載

39 キッチン菜時記／飛田和緒

36 きこのうのあしもと、あすの空／文〓黒田美法 絵〓鈴木千佳子

34 真宗と大拙と私／池田向一

32 唯信鈔文意を読む―唯念仏のころ／山田恵文

30 出会いの真実―嘆仏偈を読む／宮下晴輝

27 ペコロスのほどけてしゃがんで／岡野雄一

26 息でできる風景／森泉岳土

24 歌壇／永田淳 俳壇／安原葉

22 同朋のひろば

40 仏事作法のひとこま／近松誉

41 どうぼうパズルdeひとやすみ

42 録音から立ち現れる 東本願寺の「音景」／柳沢英輔

44 古写真でつづる東本願寺

46 あなたのとなりの僧侶^{おぼやうさん}

48 哲学者と僧侶／谷川嘉浩×中山善雄

50 一切の幸せ／作〓岩川ありさ 絵〓物田紗希

53 生きづらいこの世界でも／竹田ダニエル

54 日々平熱のソウル／中田亮



18 ブ・ポ・ソの語り場―言葉って何？ 真実って何？

16 「寄稿」シジュウカラと言葉の力／鈴木俊貴

14 「寄稿」音声学的瞑想のすゝめ／川原繁人

11 「インタビュー」ことばは友達。もつと身近に考えて
変えられるときには変えればいい。／中村桃子さんに聞く

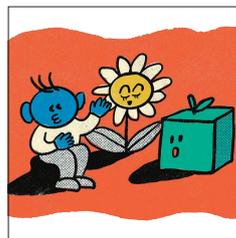
06 「インタビュー」言語は世界を見わたすための
「窓」のようなものです。／吉岡乾さんに聞く

「言語学」がおもしろい

特集

02 インタビュー 町田康

僕らの魂は、言葉っていう服を着せんと、
外に出て行かれへんと思うんですよ。



僕らの魂は、言葉つていう服を着せんと、外に出て行かれへんと思うんですよ。

町田康
(作家)

10代でパンクバンド「INU」のボーカルとしてデビュー。
2000年に小説『きれきれ』で芥川賞受賞。

それらしきにとらわれることなく

——歌手として、小説家として、これまで言葉による表現を続けられてきました。作品を作る上で大切にされているのはどんなことでしょうか。

おもしろい文章を書くコツは、「本当のこと」を書くことです。文学には「文学辞書」みたいなものがあり、ロックには「ロック辞書」みたいなものがある。そのなかの語彙だけを使っていれば、それらしく聞こえるものになる。でも、例えばロックの辞書の常套句、プリセットされた言葉ばかりで反体制的なことを語っていたとしても、本音らしい意匠をまとうているだけで、それは「建前の議論やんげ」と思ってしまう。よくよく考えてみれば、僕らが普段しゃべったりするのは、もつと違う言葉のはずです。それらしきにとらわれずに広く言葉を選んだほうが、「本当のこと」を書くことができると思います。

あと、言葉のミックスというのは意識しています。硬い言葉と、ものすごく柔らかい言葉を重ねて、うまく調節して使うことによって、その

リズム感のある独自の文体を確立し、
読者を魅了してきた作家・町田康さん。
近年は古典の新たな解釈にも挑戦し、
昨年以上梓された『口訳古事記』は大きな話題になりました。
そんな町田さんに、言葉の表現についてお聞きします。

撮影・林直幸

(NHK出版新書)のなかで、文学と言葉の関係について語られていますね。

僕が幼い頃には、文学の言葉が日本語に対して権威的に存在していた感じが、まだかすかにありました。でもだんだんとそれはなくなって、テレビのなかの「マスコミ言語」みたいなものに、自分たちが話す言葉も侵食されてきた気がします。みんなが使う言葉が同じようになってしまえば、人の頭の中が一色になっていく感じがするんです。それに抵抗するのが文学なのかなと思います。

自分のなかにあつて、外に出せないものがあると思うんですよ。それは気持ちであるとか意識、魂と言えはいいのかもしれない。それを外へと表現できるのは、おそらく言葉しかありません。

裸では外に出られませんよね。僕らの魂は、言葉という服を着せんと、外に出て行かれへんと思うんですよ。だけど、服にもいろいろあつ

落差による力が生まれたりする。例

えば、現代の若者の言葉や、昔の若者の言葉、昔の年寄りの言葉。あるいは大阪の泉南や八尾、河内の言葉を持ってきたりしてミックスすることで、表現の荒々しさが生まれたり、ある種の爆発が起こるとおもしろいなと思いますね。

——昨年以上梓された『口訳古事記』(講談社)は、千年以上前の古典というイメージを一変させるような、関西弁もまじえた大胆な口語文体で書き切られました。

『古事記』は、天地創造から始まるわけですから、スケールが全て人間を超えています。ですから、それにふさわしいエネルギーのある言葉

遣いというのが必要になってくるなと思います。あと、途中から舞台が紀州のあたりにもなりますから、そこは関西のイントネーションを入れてもええかなと。

古典文学の現代語訳というと、以前『宇治拾遺物語』にも取り組みました。日本の古典文学ということになっていきますから、なんとなくイメージで「厳かなもの」として捉えられることもあると思います。でも実際の中身は、ひどい下ネタとかアホみたいな話が多い。だからそういうものには、それにふさわしい言葉で訳した方がおもしろいだらうなと思います。『平家物語』には『平家物語』の言葉遣いがあるだろうし、『源氏

物語』でもそうです。いわゆる「古典」というだけじゃなくて、それぞれの作品にふさわしい言葉とものがある。それを見つけていくのが、こうした文章を書くおもしろさなんだと思います。

自分の魂に合った 言葉を紡いでいく

——今月号の特集は「言語学」なのですが、町田さんは『私の文学史』

おもしろい文章を書くコツは、
「本当のこと」を書くことです。

続きは本誌でどうぞ



「言語学」がおもしろい

言語の成り立ちや構造、

さまざまな角度から言語を研究する学問「言語学」。

人間は、言語によって世界を捉え、

社会や文化は言語と深く結びついています。

さらに、動物のコミュニケーションを研究する

動物言語学という分野にも注目が集まっています。

私たちが普段あたりまえのように使っている言語ですが、

実は知らないことばかり。

今月号は「言語学」のおもしろさに迫ります。

言語は世界を見わたすための「窓」のようなものです。

フィールド言語学者 吉岡 乾さんに聞く

言語を対象とした科学

——吉岡さんは、「言語学」という学問について「言語を研究対象とした科学」と説明されていますね。

よく「言語学」と勘違いされるのが「語学」です。語学は、言語運用能力をトレーニングするための英会話講座などで言語を学ぶことですよね。一方で言語学というのは、世の中のたくさんの言語がそれぞれどんな仕組みなのかを解き明かすための学問です。言語に関わることであれば何でも研究対象にして、客観的なデータを集めた上でその仕組みを解明する。そういう意味で「科学」で

あると説明しています。

普段話すとき、言語の仕組みを意識することは無いと思います。ですから日本語を話す人が、日本語を言語学的に理解しているかといったら、そうではありません。例えば、「人々」とは言いますが「猫々」と普通は言いません。これはなぜでしょうか。改めて考えると、理由を説明するのはなかなか難しいと思います。しかし説明ができなくても、僕たちは経験で判断して言語を使うことができているのです。

でももしかしたら、「猫々」という人も探せばいるのかもしれない。それはどんな人が想像してみると、

パキスタン北東部のカラコルム山脈、フンザ谷。吉岡さんが研究されている言語のひとつ「ブルシャスキー語」はこの地域を中心に10万人の話者が存在する

普段からたくさん猫と接して、個性を意識している人でしょうか。実際に調査してこうしたデータを集めることができれば、「なるほど。保護猫活動をやっている人とかは「猫々」って言ったりするのか」と納得できますよね。

——『フィールド言語学者、巣ごもる。』（創元社）の冒頭に「ざっくり言語学マップ」というものが掲載されていますね。「言語の何を考えるか」「言語をどう考えるか」「他の学問との結び付き」という三つの項目に分類されていて、言語学が扱う対象の広さを感じます。

これは本当にざっくりとした図式で、必ずしもこれが全てではありませんし、人によって位置付けは異なることもあります。この表の一番右に一般言語学とある「音韻論」「形態論」「統語論」などは、言語学の基本中の基本で、どの言語にも考えられるものです。例えば、手話も一つの言語ですが、音はありません。しかし手話における手の形や動き、眉毛や口の形などでの表現が、ここでいう「音韻論」に相当します。ただ、音や単語の作りなどは相互に

関わり合っているのです、言語学ではそれらを複合的に考えていくことになります。

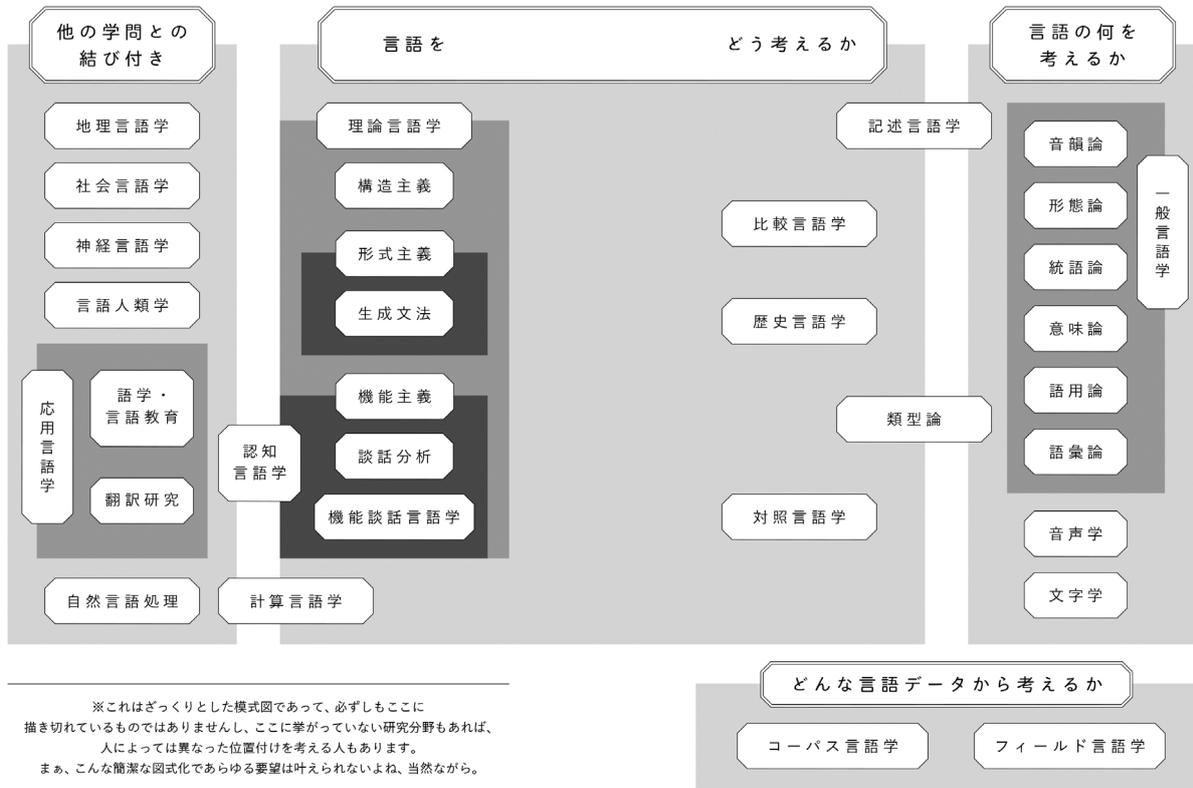
日本に研究者がいなかった 孤立言語「ブルシヤスキー語」

——言語学に関心をもったきっかけを教えてください。

言語学は中学校や高校の授業では習いません。なので、もしかするとたまたまその道を選んだ人も多いかもしれませんね。僕は高校時代に遊んでばかりで大学受験のときに困ってしまい、元々は理系でしたが理系も文系も関係なくいろんな大学を受験して、一番学費が安かった東京外国語大学のウルドゥー語専攻に進学しました。

ウルドゥー語は、パキスタンやインドなど世界に約2億人の話者がいる、日本語よりもだいぶ大きな言語です。出願するときに専攻の言語を選んだのですが、例えばカンボジア語やラオス語だと国の名前がついているからわかりやすい一方で、ウルドゥー語はこの言語かもわからなかった。なぜかそこに興味を引かれ

ざっくり言語学マップ



ざっくり言語学マップ／出典：『フィールド言語学者、巣ごもる。』（創元社）

ブ・ポ・ソの語り場

言葉って何？ 真実って何？

さてさて、今月の特集はいかがでしたか？

言語学、言語社会学、音声学、さらには動物の「言語」——。

ブーブ、ポーポ、ソーソの三人(?)とおしゃべりしつつ、

仏教の視点をまじえて、ふり返ってみましょう。

言語学と仏教？

ブーブ 今月の特集は「言語学」だけど、仏教と何か関係あるの？

ポーポ 実は関係があるんだよ。もう少し言うと、近代の仏教の学びかたと関係がある。

日本ではもともと、主に各宗派内で仏教の教義が学ばれてきた。それは「宗学」とも言われるよ。そこに「仏教学」という学問が西洋から入ってきた。優秀な僧侶たちが留学して、日本に新しい学問を持ち帰ったわけだ。
ソーソ 仏教学って、古代インドの言葉、たとえばサンスクリットなどを学んで、お経や注釈書を研究する学問、と考えるといいのかな。

ブ ふーん。それで？

ポ 仏教学にはサンスクリットやパーリ語、チベット語を学び、残された文献を通して仏教を明らかにしていく一面があるんだけど、これは日本国内で研鑽されてきた宗学とは別。宗学も仏教の学びだけど、近代の仏教学とは異なるんだ。

18世紀末の西洋で、「サンスクリット」という言葉はギリシア語やラテン語と比べてもすごい！というような発見があったんだね。この発見によって、言語学という学問はどんどん展開していったとも言われている。西洋の古典を学ぶようにインドの古典を研究することもはじまって、仏教の文献を課題にする近代の仏教学が成立し、日本にも伝わったんだよ。

ソ 当時、インドを含め植民地をめぐる争いもあって、西洋は東洋への関心を深めていったんだね。

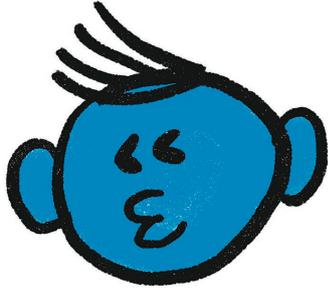
ブ 植民地支配と同時代、というのはモヤモヤする話だな。

ポ そうだね。とりあえず、いま確認したいのは近代の言語学の展開と、仏教学の誕生は関係しているということだよ。

ソ サンスクリットなどの文献を読み解いて仏教を学ぼうということは、これまでの日本では主流ではなかったよね。日本の仏教界は漢訳の文献をメインに仏教を探究してきたんだから、近代の仏教学にはびっくりしただろうね。

ブ 大乘仏教といわれる教えは、ブツダが命を終えて数百年後にあらわれたって聞いたことがあるけど、そうなの？ 阿含経という古いお経には浄土真宗で大事にされている阿彌陀仏といった仏さまは出てこないそうだね。

ポ そう。だから、大乘仏教はブツダが説いた教えではない(大乘非仏説)という考えかたがおもむろに議論



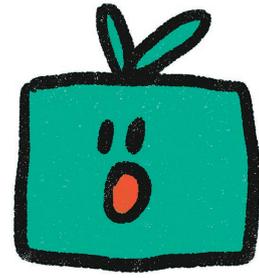
ブーブ

ぶうぶうと問いを立てるのが好き。
「聞かなきゃわからん！」



ホーポ

ほわーんと答える。
「そうだね」と受け流すことがある。



ソーソ

うなずきつつ、少し別の視点から
話をふくらませるのが得意？

されるようになって、当時の仏教者は本当に葛藤した。それで白髪になった人もいたそうだよ。

ソ 明治以降、西洋の思想や科学がどんどん日本に入ってきて、仏教にかぎらず、さまざまなことが揺れ動いた時代って感じがするね。「これまで同様の学びを淡々と続けるべき」と考える人と「それではダメ！」と考える人がぶつかることもあった。ブッダや親鸞の言葉を自由な心で研究しようとした先輩のなかには宗派とのあつれきを経て、関連学校の職を辞めたり、さらには僧籍から離れる人さえいた。そういう意味では言語学という学問の展開が、いろんなところにこだましている気がするよ。

音声学と「三帰依文」

ブ 音声学って学問も言語学には含まれるというし、いろいろなんだな。

ポ 言語は声として発せられる音でもあるから、その側面も当然研究されてきた。今回の特集でいえば、川原繁人さんはどういう仕組みで発声という行為が成り立っているか、書かれているよ。

ソ 人間の身体ってこんなに繊細にできているんだなんて驚かされたよ。『同朋』では以前「声」を特集しているけど(2024年5月号)、ちがった視点から考えることができた気がする。

ブ おれは瞑想したことがないからよくわからないんだけど、自分の身体のことを知れたのはよかったな。

ポ そうだね。自分の身を知ることを通して「こんな奇跡的なことが起きてるんだ」と、少しでも自分を大事にできれば、他の人のことも大事にできるよね。私たち一人ひとりがそれぞれ得難い人間の身を受けているんだから。

ソ 東本願寺(真宗大谷派)でも大切にされている「三帰依文」のはじめは「人身受け難し」だもの。川原さんの文章は、人間の身を受けた一人ひとりに尊厳がある、ということの具体的な受けとめとして読めるって思った。

男女二元論ではない言葉を

ブ 中村桃子さんのインタビューもあったじゃん。『ことばが変われば社会が変わる』って本を書かれていて、マジで良いタイトルだよな。

ポ それでふと思いついたのは、真宗大谷派が葬儀式で読誦する「和讃」について男女の区別を廃止したこと

続きは本誌でどうぞ

人は人を必要とするもの
人が必要と言える人は幸運な人。
意地っ張りが必要と言えない大人は
子どもよりたちが悪い

“People” Barbra Streisand, 1964.

高校二年生のことでしたが、カナダの学校へ一年間通いました。しばらくのあいだは言葉もつうじないので孤独があり、それなりに苦労しました。

僕を預かってくれたホスト・ファミリーのみなさんはよい方たちでしたが、仕事が忙しいので週末でも家にいません。学校のない日に遅めに起床すると家のなかには暗くて静かです。テーブルのうえに乾パンのような無味乾燥な見たことのない食べ物があり、牛乳をかけて一人で食べました。

ほとんど味のついていない、工業品をおもわせる無機質な食べ物「セリオール」と呼ばれていました。北米の人たちはこんな非常食もどきを毎日食べているのかと、戸惑ったものでした。のちにそれは日本では「シリアル」と呼ばれていると知りました。

そのセリオールとやらをがりがりと噛んでいますと、目の前にある箱にマスコッ

第16回

日々平熱のソウル

中田 亮

セリオールのトラ

トのトラの絵が描いてありまして、愛嬌たっぷりなトラがなにかを言っているのですが英語ですからよくわかりません。たぶん、二箱買えば一箱無料になるとか、券をあつめて郵送したら食器が当たるとか、そんな類のことだったと思います。僕は食べ終えるまでのあいだ、満面笑顔のトラとにらめっこしました。

言葉がわかるようになるまで、異国の地の人たちは、大人も子供も冷たかった印象をもっています。いまから思えば、それが欧米の「個人主義」というやつで、高校生だった僕をそれなりに一人前として扱ってくれたのだとも言えます。何ごとについても、自分ではつきり物を言わなければ先方から差し出してもらえないのではないのだと文化習慣の違いを理解するまで時間がかかりました。また、自分も複雑な年ごろで、人と打ち解けるのが苦手であったと思います。

そんな時期でしたので、僕にむかってニコニコと笑いかけてくれる者といえば、セリオールのトラや、チョコレートや飴の菓子箱に描かれているマンガばかりのようには思われませんでした。

「この国では、商品のマスコットや娯楽作品のキャラクターたちはこんなに愛想をふりまいて友好的なのに、実際の人

びとは他人に無関心で、困っていても助けたくない。いったいどちらが本当なのだろう？」

他人に干渉することが当たり前の日本の田舎からやってきた若者はそんなふうを感じていました。

あれから三十余年が経ち、日本の街角では、子どもじみた「マスコット」やら「キャラクター」やらが大手を振って、通りゆく大人に微笑みかけています。そして政府の施策や企業活動の告知を担っています。昔はそんなものはいなかったはず。たとえば一九六四年の東京オリンピックでも一九七〇年の万博でも「公式キャラクター」などつくられていません。

イラストで描かれた動物やら奇妙なキャラクターばかりが人々に笑顔をふりまくのは、人間どうしの関係が薄くなり、人と人の距離が遠くなったことの象徴に思えてなりません。



Barbra Streisand (1965年、レコーディングスタジオでマイクの前に立つ様子 / Photo by Fotos International : getty images 提供)

なかたりょう

1972年大阪府生まれ。ミュージシャン。ファンクバンド「オーサカ＝モノレール」のボーカル担当。アフリカ系アメリカ人の文化を扱った映画の字幕監修や翻訳なども手がける。